

## >> 限られた時間でのソフトフロアホッケーの講習ポイント

### 1 第一にソフトフロアホッケーの楽しさを伝え、またやってみたいと思ってもらうこと

最初は概要を説明し、とにかく体験してもらおう。但し、怪我に繋がるような危険な反則プレーや行為については最初に説明します。

### 2 コートづくりは簡単に

バウンダリーボードを用意するのは困難なため、コートを作ります。その場合、コートの4隅にコーナーコーンを置き、センターサークルは、バスケットボールのセンターサークルを使います。センタースポット、ペナルティーポイント、ゴールクリース、ゴールラインはラインテープで明確にします。パックがコートの外に出た場合は相手チームがパックの出た位置からのショットでゲーム再開とします。また、反則があった場合は、反則を犯したチームの相手チームが反則があった場所からフリーショットでゲームを再開します。選手またはスティックがゴールクリースに入った場合(反則)は、ペナルティーポイントからフリーショットを行います。

※下線部分は、フロアホッケーの正規ルールではなく、前山直先生が独自に考案されたルールです。

### 3 基本操作の練習

フロアホッケーのルールでは、各プレーヤーに役割がありますが、限られた時間内での講習では全員にこのスポーツの楽しさを知ってもらうことを第一義とするために、基本のスティック操作を教えてから実際にパックを運んだり、味方にパスしたり、ゴールする爽快感を味わってもらいます。

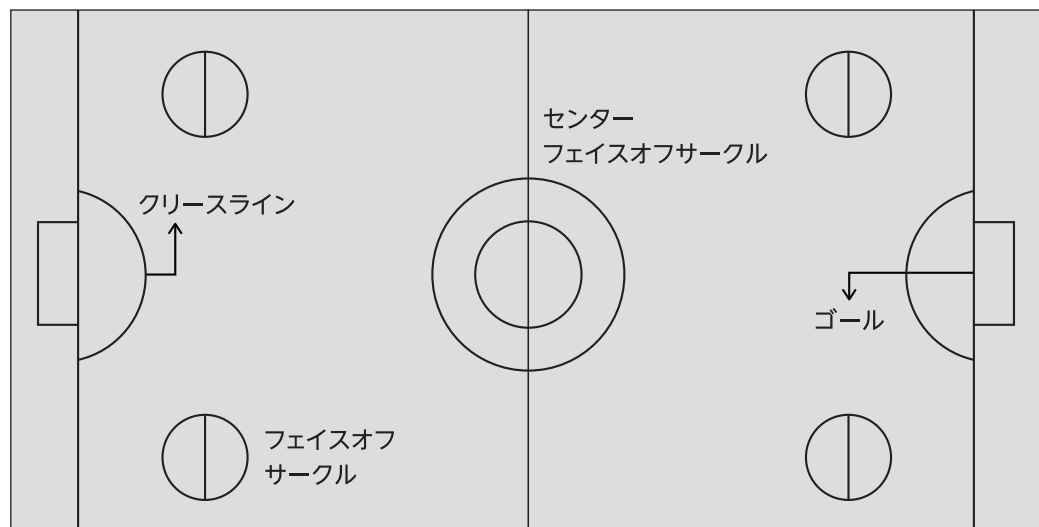
### 4 反則とマナーを指導

基本操作ができれば、主な反則を教えます。特に敵味方関係なく暴言を吐かない、暴力行為は一切行わないことは強調して伝えます。子どもの場合、プレーに熱中するあまりの反則が多々見られます。プレー中そのような行為があったら、その都度ゲームを止め、反則に関する指導やマナーの大切さを説明します。

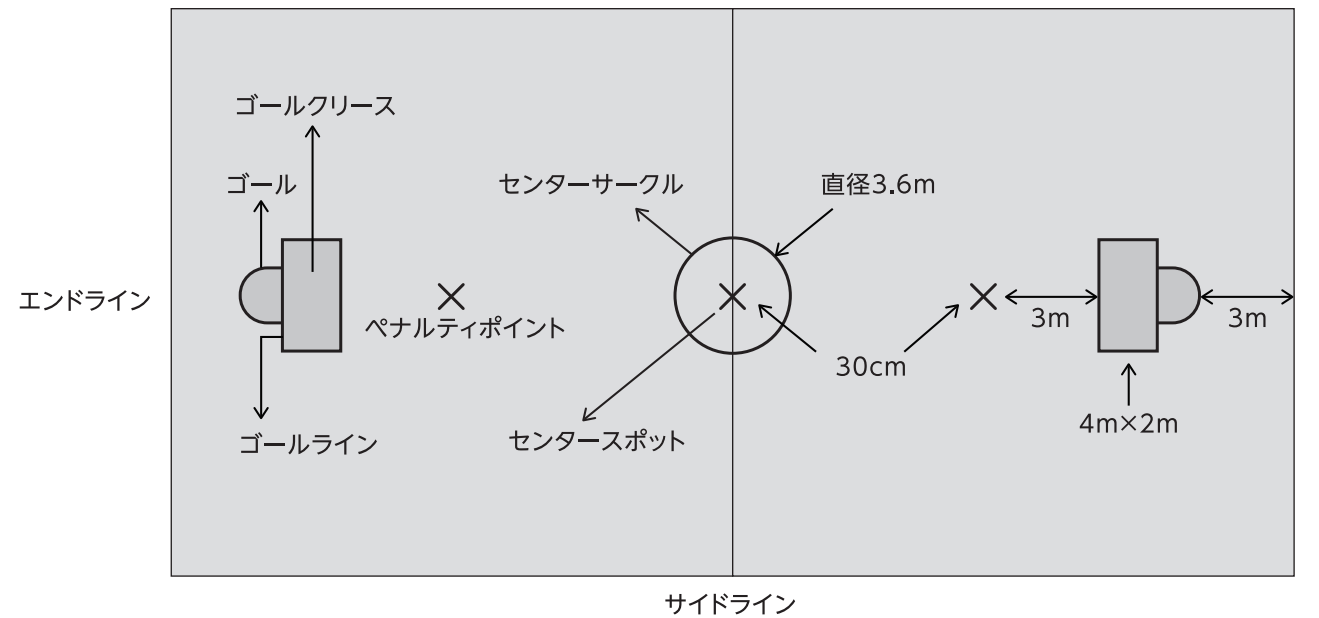
### 5 全員が参加し、楽しめるように工夫する

次にゲームに移ります。ゲーム中、パックに触れる機会の少ないプレーヤーがいれば、例えばゴールするまでに最低3人がパックに触れなければならない、必ずパスでつないでいかなければならないというルールをつくり、全員がプレーに参加できるようにすることもできます。また、他人のプレーを見たり、応援したりすることも子どもたちにとっては貴重な時間です。他人のプレーを見て自分に足りないものを感じたり、チームワークの大切さに気づきます。また、勝者を称えるだけでなく、敗者をいたわるマナーを身につけさせます。単に技術を指導するのではなく、スポーツを通して人間性を高めることを念頭に置いて講習を行っています。

## 【フロアホッケーの公式ルールに基づくコート図】



## 【前山直先生が提案するコート図】



ゴールクリース：半円を描くのが難しい場合は4m×2mの長方形で代用します。

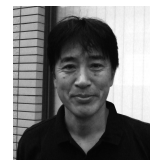
ペナルティーポイント：選手またはスティックがゴールクリースに入った場合のみここからフリーショットを行います。

## >> これからのニュースポーツ

ニュースポーツは「だれもが、いくつからでも、いつまでも」できるスポーツです。適度な運動は身体的な効果だけでなく精神面にもよい影響を及ぼします。

最近の子どもたちは外で遊ぶことが少なくなり、成長時期に体や心を鍛える機会が失われています。そんな子どもたちにはチームスポーツを勧めます。友だちと協力する大切さを学び、互いに助け合い、励まし合いながら人間的に成長していくことができるからです。ソフトフロアホッケーはチームのプレーヤー全員が均等にプレーでき、反則に対しては厳しくチェックされるのでチームメイト全員が勝敗に関わることができ、喜びも悔しさも全員で分かち合うことができるようになると思っています。

ニュースポーツは「競うことよりも楽しむことを主として」います。もちろん、スポーツですから勝ち負けがあり、技術を磨く必要もありますが、それ以上に楽しく運動ができて心身ともに健康になり、仲間づくりや世代間交流もできるニュースポーツは、今後あらゆる世代の方たちから支持をうける存在になると確信しています。



前山 直先生 TADASHI MAEYAMA

1955年、滋賀県生まれ。1978年、日本体育大学体育学部体育学科卒業。藍野学院短期大学助教授を経て、現在 数々の大学でスポーツ指導を行うとともに、NPO法人フレンドリー情報センター常務理事兼主任研究員として生涯スポーツの研究、指導を行う。日本キンボールスポーツ連盟、日本ワナゲ協会、日本スカイクロス協会の役員も務める。2011年4月梅花女子大学の特任教授に就任。